



歌川広重初代による『名所雪月花』。左から「井の頭の池弁財天社雪の景」、「たま川秋の月あゆ猫の図」、「小かねいつゝみの花盛」(出典: 国立国会図書館デジタルコレクション)

ヒマラヤ山脈
ネパール東端の村ナム
チェバザール北東から見たエベレスト(左)とローツェ(右)。頂上付近にはジェット気流による旗雲がたなびいている。(撮影: 小嶋智)



【巻頭対談】

四季とたわむれ、四季を詠む

〈大地〉から視線をすこしあげると、そこには風が吹き、雲が流れ、光がふりそそいでいる。空や風に形はなく、雲はつかむことができない。私たちの頭上にもたらされる光や雨は、私たちの暮らしにどっしりと関わる。穀物や野菜、果樹の多寡から、私たちの気分までを左右する。見えず、つかめず、人が操ることのできないそれらを「読む」ことは、私たちの未来につながるのかもしれない。とはいえ、いまに生きる私たちの自然を見つめる力、ふれあう力は衰えてはいないだろうか。地球規模の視点で気候をダイナミックに観察する研究者と、季節の細やかな変化に目を凝らす俳人との対話から、自然とともに暮らしてきた日本人の感性のルーツが見えてきた

安成哲三

(総合地球環境学研究所所長)

×

長谷川 權

(俳人)



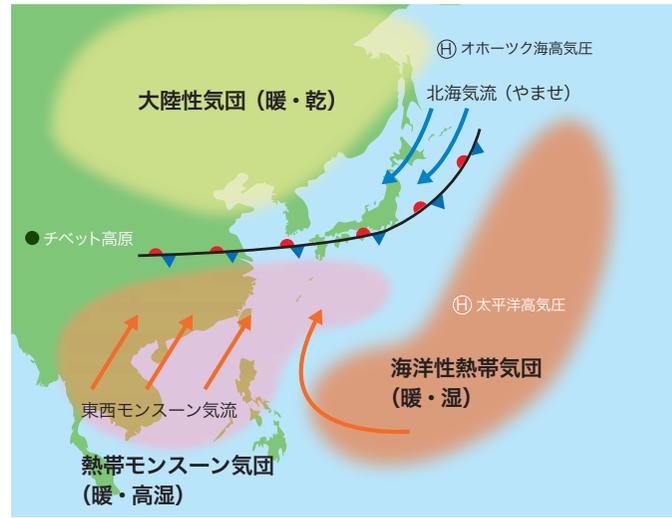
でも一〇〇〇ミリメートルを切ることはありません。長谷川 ●なぜそのような気候になるのですか。安成 ●梅雨や冬の大雪を夏と冬のアジアモンスーンがもたらした結果です。夏はアフリカ東岸のマダガスカル付近で発現して、湿ったインド洋の空気の供給を受けながら南アジアに到達し、やがて延伸して東アジアまでの約一万キロメートルにわたって形成される高温多湿な空気の流れで

長谷川 ●日本の文化は、アジアモンスーンの湿潤な気候のもとで醸成されてきた面がありますね。日本の代表的な作物の稲作にしても、田植えから稲刈り、春の準備まで、季節にあわせて一年のサイクルがあります。日本人は、そのサイクルを土台に暮らしてきたからか、『歳時記』には米づくりに関連する一連の行事が並んでいます。じつは、それが俳句の宇宙観の大きな柱ともなっています。そういうアジアのモンスーン地帯というのは、世界でも特異な場所ではないですか。安成 ●特別ですね。湿潤な地域はほかにもありますが、モンスーン地帯の降水量は桁違いに多いです。日本では年平均一五〇〇〜二〇〇〇ミリメートル、多い場所では四〇〇〇ミリメートルの雨が降ります。降水量の少ない瀬戸内の内陸部

もくじ

- 02 巻頭対談
四季とたわむれ、四季を詠む
- 14 私を育てた〈風と景〉
ほんとうの幸せを求めて
中村桂子
- 16 いぶきの輪っか
アサギマダラと
フジバカマをめぐる緑と生
森本幸裕
- 18 近代学匠伝
コスモス国際賞
2008年度受賞
ファン・ゲン・ホン博士
- 20 日本植物紀行
横倉山の多様な地層が育んだ
ジョウロウホトギス
- 21 協会事業紹介
小・中学校における
生態園づくり
伊丹市立瑞穂小学校
- 24 はかなく、清く、潔く——
日本の伝統園芸植物
百両金 カラタチバナ
太平の世にきらめいた百両の緑

すね。さらに梅雨を決定づけるのがチベット高原とその南縁のヒマラヤ山脈です。東西南北を高峰に囲まれたチベット高原ですが、高原の東側と西側とは気候はずいぶん違います。高原より東側（東アジアから東南アジア）は湿潤ですが、カラコルム山脈から西側はインドとパキス



梅雨前線のできかた

梅雨前線は北側の乾いた大陸性気団と南側の湿った温かいモンスーン気団の境目にできる。南西モンスーンの湿った気流は前線付近で収束して雲をつくり、梅雨の雨を降らせる

秋冬で区分けしている。欧米の詩のアンソロジーをつくると、愛や悲しみ、戦争などで分類されますが、日本ではまず季節で句を分けて、つぎに恋がくる。つまり、人間が生きるには食べなくてはいけないし、子孫を増やさなければならぬ。その食べることは農業や漁業などの生産に直結しているから、農業のサイクルはとてつないじ。

安成 ●時代をもっとさかのぼった『万葉集』にも季節の話や恋の話がありますが、これが『古今和歌集』のルーツになるのでしょうか。

長谷川 ●ルーツです。ただ、季節や恋といった分類は、『古今和歌集』にはじまりました。それがいま『歳時記』につながっています。

しかし、古代や中世の人の感覚を想像するといちばん酷で、たいへんな季節は夏だったのではないかと思うのですよ。

安成 ●まさにそうだと思います。

長谷川 ●『徒然草』に、「家の作りやうは夏をむねとすべし」とありますが、これは兼好法師の卓見です。日本文化のありようを一言で言い得ています。あの時代、蒸し暑い夏こそたいへんで、冬の寒さは「どうってことない」と考えられていた。

安成 ●日本の蒸し暑さも世界に類をみません。赤道直下のインドネシアなどは、とても暮らしやすいのです。夕方になると毎日のようにスクールがあり、降ったあととはとても気持ちがいい。エアコンなんていりません。蒸し暑い時間帯もあります。日本のほうがひどい。

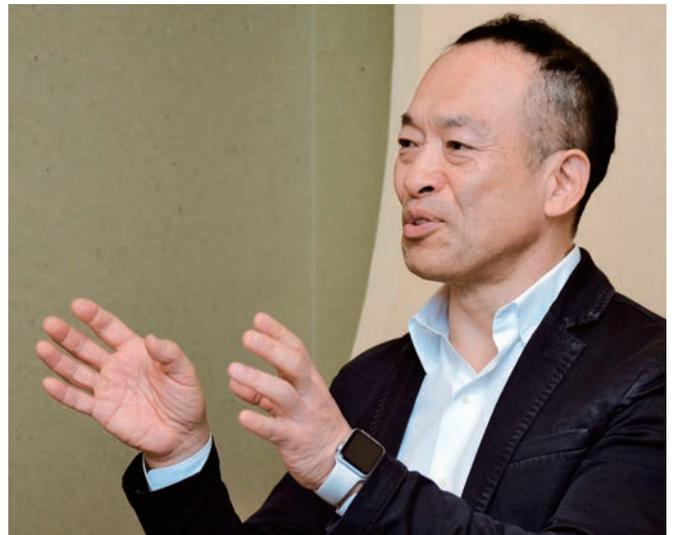
タンを境に乾燥気候が広がっています。和辻哲郎さんの『風土』は、船でヨーロッパ留学に向かう経路で見た香港やシンガポール、インド、スエズ運河など、それぞれ異なる気候と異なる文化に着想を得たのだそうです。チベット高原を境にしたユーラシア大陸の気候のコントラストは、北米大陸にはありません。

長谷川 ●ユーラシア大陸の絶妙な地形が生んだのですね。

安成 ●日本は中緯度とよばれる北緯三〇度に位置しています。夏は暑いのですが、冬はシベリアからの寒気が降りてくる。この寒気が強烈に強くて、中緯度地域にありながら日本はもっとも冬の気温が低い。

長谷川 ●アジアモンスーン地域のなかでも、日本は島国であることでさらに特徴的な気候区分を構成するのです。

安成 ●日本海側の大雪も世界に類をみません。新潟県や富山県の年間降水量の大部分は冬の雪です。山に膨大な雪が積もると、春から夏にじわじわと解けて豊かな水になる。これが水田稲作にもプラスになっています。



はせがわ・かい
1954年に熊本県に生まれる。東京大学法学部卒業。読売新聞記者をへて、俳句に専念。朝日俳壇選者、ネット歳時記「きごさい」代表、俳句結社「古志」前主宰、東海大学文芸創作学科特任教授、神奈川近代文学館副館長。たくさんの句集のなかには、東日本大震災を詠んだ歌集もある。芭蕉、一茶、正岡規、高浜虚子などの俳人研究や日本文化についての一連の論稿、俳句入門書などの著書がある。

長谷川 ●冬は寒くても工夫して温かくできる。夏は高温で高湿度だから、食べものは腐るし、いろいろな病原菌が発生しやすくなる。すると皮膚病や疫病がはやる。祇園祭をはじめ、日本には夏祭りがたくさんありますが、そのほとんどは疫病退散を祈るお祭りですね。

日本人は夏をいかに涼しく過ごすかという工夫をしてきました。それがいまでも日本文化として残る要素の大半を占めている。大陸や欧米からさまざまな文化が日本に伝わりますが、夏の蒸し暑さに適合するような、人を涼しくさせるようなものがないと、後世に残りません。

長谷川 ●冬は寒くても工夫して温かくできる。夏は高温で高湿度だから、食べものは腐るし、いろいろな病原菌が発生しやすくなる。すると皮膚病や疫病がはやる。祇園祭をはじめ、日本には夏祭りがたくさんありますが、そのほとんどは疫病退散を祈るお祭りですね。

日本人は夏をいかに涼しく過ごすかという工夫をしてきました。それがいまでも日本文化として残る要素の大半を占めている。大陸や欧米からさまざまな文化が日本に伝わりますが、夏の蒸し暑さに適合するよう、人を涼しくさせるようなものがないと、後世に残りません。

日本ほど寒くて雪の降る冬は世界にない

安成 ●和歌のころから「雪月花」を詠んできたように、雪は昔の人も好きだったようです。京都には大雪は降りませんが、雪は楽しみだったのか、よく歌の材料になっています。もちろん、雪は農業にだいじだったからという理由もあるでしょうがね。

長谷川 ●『古今和歌集』の冬歌には、吉野の里に降る雪



やすなり・てつぞう
1947年に山口県に生まれる。京都大学大学院理学研究科博士課程修了。同大学東南アジア研究センター助手、筑波大学地球科学系教授、名古屋大学地球水循環研究センター教授などをへて、2013年から現職。筑波大学名誉教授、名古屋大学名誉教授。専門分野は気候学・気象学、地球環境学。

家の作りやうは夏をむねとすべし

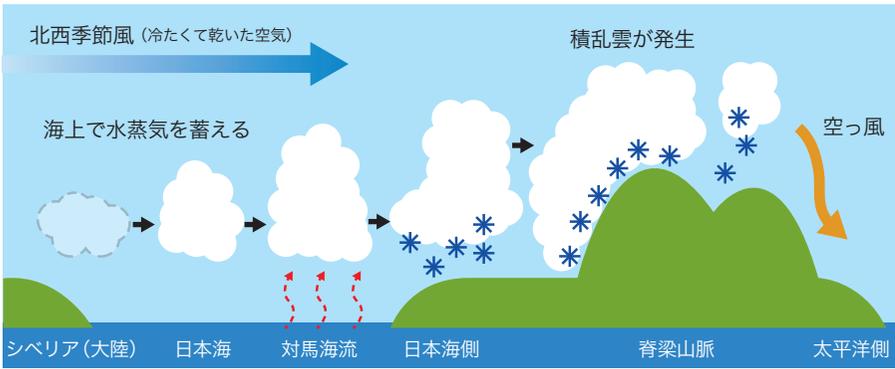
安成 ●私も俳句を詠むのは好きですが、なぜ俳句に季語が必要なのでしょう。俳句が日本の風土に根差して生まれた文化だからでしょうか。もっといえば、農事暦や農業のサイクルが人びとの暮らしに重要なことから季節に意味を与えるのでしょうか。

長谷川 ●そうだと思います。俳句にかぎらず、日本の詩歌は季節的です。『古今和歌集』は、春夏

の句が並んでいます。俳句でどの季語がもっとも使われているかを調べたデータを見ると、雪の俳句がいちばん多かった。雪はとても親しまれていたのでしょうか。

安成 ●大伴家持は国司として日本海側の越中(現在の富山県)に赴任しています。大雪に遭遇したようですが、それでも嫌な雪ではなく、楽しんでる句のように感じます。

長谷川 ●家持がそのあと山陰の因幡国(現在の鳥取県)に赴任した年の新年に詠んだ「新しき年の初めの初春の今日降る雪のいやしけ吉事」



雪雲の発生

大陸からの冷たく乾いた北西季節風は、日本海上空で暖かい水面からたっぷりと水蒸気を供給され、雪雲を発生させる。雪雲は日本列島の脊梁山脈付近でさらに発達し、日本海側の平野から山沿いに大雪を降らせる。北西季節風は、雪を落とすと「空っ風」などとよばれる冷たく乾いた風として、太平洋側に吹き降ろす

アでも、乾季が半年間つづきます。日本のように秋があつて、冬には雪が降るような四季はありません。
長谷川 ●韓国は日本よりも乾燥していますね。
安成 ●韓国にも梅雨があり、やはり雨はだいじ

ですが、ピョンチャンなどの山岳地帯をのぞいて、冬の雨や雪は基本的にはありません。
長谷川 ●韓国はとても寒いですよ。
安成 ●中国大陸も寒い。でも、雪がたくさん降るのは日本だけです。冷たいシベリアからの冷たい冬の季節風が暖かい日本海でたっぷり水蒸気をもらって雪を降らせるからです。このような大雪のしくみは世界に類をみません。強いて言えば、北米五大湖付近には日本と似たようなメカニズムの雪、「レイク・エフェクト・スノー」がありますが、雪の量は日本よりはるかに少ない。
長谷川 ●私が新聞記者だった時代、新潟に年間ほど滞在しました。冬の新潟の海岸では、雪雲が頭に触れるくらいの高さまで降りてきます。そんな光景が半年間つづきます。
安成 ●海岸付近での雲はもつとも発達します。北西からの寒波が、日本海上を渡るときに雪雲がどんどんと発達して、日本列島の海岸線沿いでもつとも発達する。
長谷川 ●それとはまったく違う風景が韓国。冬に韓国中部のやや東にあるアンドン市に行つたのですが、気温は零下二〇度に近く、ほんとうに寒かった。洛東江という大きな川が一面凍つていて、川の中の島まで歩いて行ける。それでも雪はほとんどないし、空には青空が広がっていました。
安成 ●氷河期の日本海は湖でしたから、冬の日本海は凍っていたでしょうね。ただ、水蒸気は海から供給されませんから、雪はなかったのではな

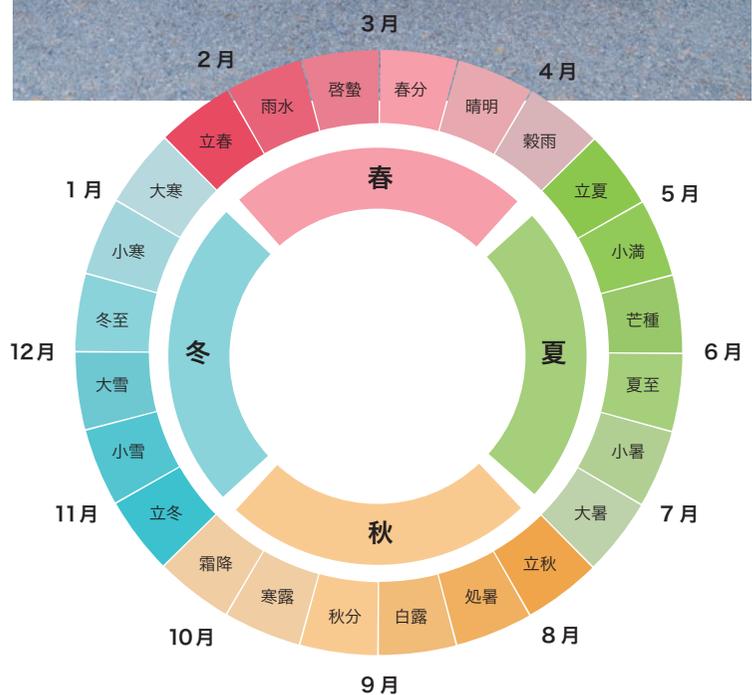
いかな。あつても、いまほどの量ではないはずですが。
長谷川 ●大雪が降るようになったのは、湖が海になつて対馬暖流が日本海に流れるようになったからなのですね。
安成 ●温暖化が進むと雪が消えるという話もあります。日本付近の海面の水温は、一〇年前とくらべて二度から三度高くなっています。
 日本の位置する中緯度の気候を支配するもうひとつの要素は偏西風です。ヒマラヤ山脈やチベット高原があるため、偏西風は北寄りに蛇行し、モンゴル・シベリアから日本付近に寒気として下りてきます。それが対馬暖流の水蒸気を取り込み、それを雪として降らす。このパターンはこれからしばらくはつづくかと予測されています。しかも、海水温が高いと水蒸気の供給もさらに多くなるので、冬の大雪もつづく可能性もあります……。
 ただ一方で、気温が上がると雪解けが早くなります。そうすると、田に水を引くタイミングが変わるなど、農業に影響がでてきます。いっぽうで、温暖化で北海道では稲作がしやすくなるという話もあります。
二十四節気と季節のズレが日本文化を育んだ
長谷川 ●日本人の季節感は、世界的にみてとても繊細だという説がありますね。その季節観をもとに、食や衣服、文学などの文化が育まれてきたと。日本の文化は「季節文化」といっても



2015年1月に京都市上空を通過する雪雲。鴨川右岸、河原町五条あたりから東山方面を撮影したもの。(撮影：安成哲三)

という歌があります。雪がたくさん降るように、人びとの幸せもたくさん訪れてほしいという願いの歌です。
 親しまれていると同時に、雪は農業用水の供給源です。このことは当時から知られていて、降雪量でその年が豊作か不作かを占っていた地域もありました。
安成 ●「大雪の年は豊作だ」という知識や経験がそのころからあったのでしょうか。
 とところで、夏の蒸し暑さは季節にはなっていないのですか。(笑)
長谷川 ●「雪月花」は春の花、秋の月、冬の雪です。夏だけがありません。
安成 ●夏の季語といえば「夕涼み」でしょうか。昼間の蒸し暑さをやりすごして、夕方になるとやっと涼しくなる。これが夏の大きな楽しみだったのでは……。
長谷川 ●モンsoon地帯のなかでも、日本の気候は韓国や中国などとは違うのですか。
安成 ●夏のアジアモンsoonは、インドから始まり、東南アジア、中国大陸、日本へと延びるように季節を進んでいきます。終息するときは、その逆を辿ります。そういう雨季の雨は、農業には恵みの雨です。だから、「今年の雨が降らなかつたらどうしよう」など、雨への関心は高いですね。乾季には「雨季にきちんと雨が降るように」と祈る雨ごいの祭りや行事などの文化がつくられています。モンsoon季の雨はだいじなのです。ただ、雨季が終わると、インドでも東南アジ

よいのではと思うのですよ。
 繊細な季節感の醸成に大きな役割を果たしたのが暦だと、私は考えています。旧暦とよばれる太陰太陽暦は中国から伝わってきましたが、同時に二十四節気も伝わってきた。二十四節気の立春は二月の初め。暦が生まれた黄河のあたりでは二月には春の訪れがあるのかもしれませんが。しかし、日本の二月はまだまだ寒いさなかなです。(笑) 梅の花は咲きだすところですが、感覚でいうと真冬。



二十四節気
 1年を春夏秋冬の4つの季節に分け、さらにそれぞれを6つに分けたもの。太陰太陽暦(旧暦)のうるう月を設ける基準となっている

安成 ●立秋というけれど、八月の初めはいちばん暑い時期。
長谷川 ●当時の人たちは、どうしてこんなに暑いのに秋で、寒いのに春なんだと思ったはずですよ。自分たちの感覚とは異なる文化が伝わってきたのに、それをはねのけることもせず受け入れている。当時の日本人が一所懸命に追いつこうとしていた中国から伝わったものだからでしょう。先進国の中国が言うのだから、なにか理由があ

るはずだと、そのなにかを探る。暑い夏だけでなく、なにか秋の気配があるはずだと探りはじめたのが、繊細といわれる日本人の季節感の根本ではないのかなと思います。
 『古今和歌集』の秋の最初の歌は、「秋来ぬと目にはさやかに見えねども 風の音にぞおどろかれぬる」という藤原敏行の歌です。「目に見たかぎりには真夏だけど、暦では秋になっている。耳をすませると、風の音に秋の気配をかすかに感

じる」と秋の気配を探っているのです。

同じように、「雪が積もっているけれど、どこかに春の気配があるだろう」と探る春の歌もあります。雪解けの水の音が聞こえたり、梅が一輪咲いたりすることに春を見出す。中国から伝わった二十四節気が日本の季節の実感とすこしずれていたことは、かならずしも良くないことではなかった。それをどう克服するかということからいまの日本の文化が生まれてくる。

安成 ●「ズレの文化」ですね。(笑)

長谷川 ●そう、二十四節気が日本の気候とずれていたがために、この豊かな日本の季節の文化ができたのかもしれない。

安成 ●日本人はそういう暦をだいにじにしてきましたね。もとは農業に関係していたことも理由なのでしょうね。

長谷川 ●日本の文化、暮らしには、三つの暦が根づいていると思います。いまの私たちは太陽暦で動いていると思うけど、じつはその裏に旧暦がある。

旧暦の行事はいまもたくさん残っていますね。ところが旧暦が伝わる前に使われていた満月を中心にした暦もあります。旧暦は新月からつぎの新月までを一か月としています。旧暦が伝わる前の日本人は、おそらく満月を基準に一月を区切っていたと思うのですよ。ですから、中秋の名月をはじめ、満月の時期に実施される行事がいくつも残っている。お盆とお正月も、もとは満月の行事だったのでしょう。太古の正月がい

→紫雲山頂法寺六角堂の柳の下にて。「縁結びの六角柳」とよばれる。平安時代、夢でお告げを受けて、嵯峨天皇がこの柳の下で妃となる女性と出会ったといわれることに由来する



まも一月一五日の「小正月」として残っています。
安成 ●太陽暦になったいまも、旧暦とその前の暦が消えずに併用されているという日本はおもしろいですね。
長谷川 ●小正月、お盆、中秋の名月といった満月の行事は、仏教が伝わる以前のものです。このうちお盆は、仏教が伝わってきて仏教の考えががぶさったのですね。

日本の文化は、もともとモンsoon気候で育まれた暮らしの様式が土台です。それに旧暦や仏教、中国から伝わった伝説や神さま、そして太陽暦と、ミルフィーユのように積み重なり、それが幾層にもなつて成りたっている。古いものが廃棄されずに残っていた。ヨーロッパでは、キリスト教が伝わると、それ以前のゲルマン神話の神がみは悪魔にされましたね。そのような価値観・思考は日本にはないということです。

安成 ●日本はなんでもかんでも受け入れる。善きにつけ悪しきにつけ、否定せずに受け入れる。善き方によっては、いいかげん。(笑)

長谷川 ●いいかげんところが私はいいいと思います。(笑)

第二次世界大戦より前の戦争では、相手を滅ぼすと、滅ぼされた側を祀ってきた。「怨霊になつて崇られるのが怖い」からと説明される。菅原道真はその典型ですね。敗れたり、古くなったりしたものを排除しない。どうしてそのような文化であるのかは、日本文化を理解するうえで大きなカギだと思います。ヨーロッパ的な考え

方では、敗者を祀るなどはとんでもない話で、たいていは悪魔として貶められる。それが、日本では厚遇される。おもしろい国だと思えますよ。
安成 ●物事を一面だけで判断しないところがありませんね。日本の稲作は、森や山野を切り拓いて農地にしていった。水田に適したよい土地でも、森を切り拓けば土砂崩れに見舞われたり、豪雨に遭遇したりすることもある。でも、とにかく、その土地でなんとか暮らさねばならない。一つの価値観では切れないと。

宇宙の位置を刻印するための季語

安成 ●俳句にかならず季語が必要なのは、農業にとって季節の進行がとて重要なことに関係

しているのでしょうかね。
長谷川 ●俳句に季語がなければ、ただの人間界の詩になってしまいます。

安成 ●川柳はそういうものですよ。

長谷川 ●季節はなにによって生じているかというところ、地軸の傾きです。季語を入れるということとは、自分がいまいる宇宙の位置を、俳句の中に刻印するような側面がある。視点を小さな人間界から大きな宇宙にまでスケールを拡げる働きがあるのかなと思っんです。

安成 ●地軸の傾きはあらゆる地域に影響をおよぼしていますが、日本はとくに影響を受けていますね。日本では春夏秋冬それぞれに気候が変わります。農業への重要性もありますし、それぞれの季節で、桜が咲いたり、紅葉があつたり

するなかで、日本人はその変化に敏感です。ヨーロッパの人は、四季には関心がないものの、春にはえらく関心をもっています。春が訪れて気温が上がると、日差しが強くなれば花が咲く。ヨーロッパの冬は気温が低くて寒いから、春が待ち遠しくてしかたがないのですよ。だから、春に強い関心がある。同じモンソーン地帯でも、インドや東南アジアの人たちは、いつ雨が降り始めるかにいちばん関心をもっています。

長谷川 ●東海大学で俳句を教えています。何年前かに三人のスウェーデンからの留学生が受講していました。あるとき、題に「春の雪」と出したのです。すると、彼らはきょとんとして、「春に雪は降りません」という。つまり、雪が降らなくなつてから、雪が消えてからが春だという認識なんですね。

安成 ●雪が消えることが、彼らにとっては季節の変化を感じさせるのですね。

長谷川 ●日本には「春の雪」ということばがあつて、それを理解できるのは、立春以降を春だと思つていからです。そのあとに降つた雪は、みんな春の雪。
安成 ●ずれているからこそ、多様なですね。

長谷川 ●二十四節気が伝わって、それが日本の気候とずれていなければ、俳句は生まれなかつたでしょうね。

俳句をとおして季節の流れに目を向ける

長谷川 ●俳句を詠んでいて、よいことが四つあ

ります。自然をよく観察すること。日本語のことばにとても敏感になること。人とのつながりができること。最後に、ポツとできること、これがよい。(笑)

安成 ●都会に住んでみると、自然とのつながりがだんだんと薄れてくる。しかも地球全体がいま、都市化しています。日本でも都市にどんどんと人が集まるにつほう、田舎は過疎化して、地方の商店街はシャッター通り。ところが、農業、畜産業、漁業などの食料生産をはじめ、田舎のおかげで都会の暮らしは成りたつている。この感覚が忘れられている。都市と農村の両方がないと成り立たないのに、都会にいとこの感覚を忘れてしまうのですね。

そういうときに俳句を詠もうとすると、季語を考えなければなりません。いまはどういう季節なのだろうと……。すると、風や植物などの自然に意識が向かうのです。

長谷川 ●詩と歌のほかに、ポツとできるものという、ひとつは酒。恋もそうかもしれない。それと旅行も……。

安成 ●俳句を詠む日本人は、外国に旅しても句を詠みますね。俳句は日本の自然や文化を背景に生まれたものです。だけでも、外国に行つてもそこで感じたことや自然美、人の活動を「俳句」という日本文化のフィルターとおして表現する。これは異文化理解という面でもおもしろい。欧米では横文字の「Haiku」が流行つていますが、日本の俳句とは違つたのでしょうか。



江戸時代末期から明治時代の浮世絵師、楊洲周延の描いた雪月花。左から、「卯の花」、「道のゆき」、「月おほつき」(出典：国立国会図書館デジタルコレクション)

長谷川 ● 違いますね、短い定型詩というだけのものです。

安成 ● 季語は入れるのですか。

長谷川 ● アメリカの俳句協会は季語を入れるように指導しているのですが、やはり日本とは違う俳句ができあがります。

安成 ● 雪にしても、日本にはぼたん雪、粉雪、細雪などと、たくさん呼び名の雪がありますね。

雨もそうですし、風の名前もたくさんある。

長谷川 ● 日本人はそういうものに関心が深いですからね。魚の名前の多様さもすごい。

安成 ● その国や地域の人たちが関心を寄せる自然には、さまざまな言いかた、呼称が増えるのです。モンゴルには馬ということばはなく、仔馬から大人の馬まで、名前はそれぞれ違う。それだけ、モンゴル人にとって馬はたいせつだからです。



萩(ハギ)
マメ科ハギ属。秋の七草の一つとして知られている。晩夏から秋にかけて花を咲かせる

←萩は秋草文様に欠かせないものとして、着物や襖などに描かれる

ことばは水面下の風味がおもしろい

安成 ● 和辻哲郎の「風土論」を研究しているオギユスタン・ベルクというフランス人哲学者がいます。彼も俳句をすこし嗜むのですが、彼は、日本とヨーロッパとは論理体系がまったく違うといふのです。もちろん、それぞれの国にはそれぞれの論理体系があるのでしよう。そういうなかで、日本の論理体系だからこそ生まれたのが俳句なのだと思います。たとえば、ヨーロッパの言語は主語と述語の世界ですから、主語がかならず必要です。でも、日本は述語だけでも意味が通じる。俳句にも主語は必要ありません。

彼は、黄枝わうしという現代の俳人が詠んだ「風鈴の小さき音の下にいる」という俳句を例にあげます。この句には主語はありません。それでも日本人には詠まれていた状況がわかります。俳句の「切れ」で、上の句と下の句をつなげるには、背景を考えないとわからない。日本人の典型的な、伝統的な思考パターンではないかと思えます。

長谷川 ● 日本語に主語がなくてもよいというのは、文学にとつては幸運ですよ。私「私が」、「私が」といちいち言うのは暑苦しい。言わなくていいところは省く、互いに付度する世界なのです。

安成 ● 「暑いね」というだけで通じてしまう。

長谷川 ● 俳句に関心をもつ前に、私はことばに関心がありました。俳句は短いから、一つ一つのから美しい緑の萩の芽が出てくる。

安成 ● 街で萩を見かけることは少ないのですが、人との歴史的な関わりがそうさせるのか、いまも人の文化的活動のいたるところで、萩はモチーフにされつづけていますね。

長谷川 ● 萩を庭に植えたり、屏風や襖に描くのは、そういった里山の経験や記憶が絵描きや造園家に継承されているからでしょうね。われわれの命や意識は、そういう古くからの暮らしや自然環境に起因・派生しているのだという、一つのしるしでしょうね。

安成 ● どうしてこの季語がよく使われるのかわかった気がします。江戸時代の芭蕉の句にも萩はよく出てきますね。やはり江戸時代も新田開発があちこちの藩で進んでいましたからね。その過程で顔を見せる萩を、芭蕉や俳人たちは愛着をもって見ていたのかもしれない。自らの体験を超えて、深い潜在意識のようなものがそうさせるのでしょいか。

長谷川 ● ことばは一つひとつ掘り起こすと、どんなでもない脈脈にぶつかることがありますね。

安成 ● 俳句を詠む日本人の季節感、つまり、四季に向き合い四季を詠む心は、日本列島が位置する条件ならはこそ、生まれたといえるのではないのでしょうか。

二〇一七年二月二三日

京都池坊、頂法寺六角堂境内「梅の花」店にて

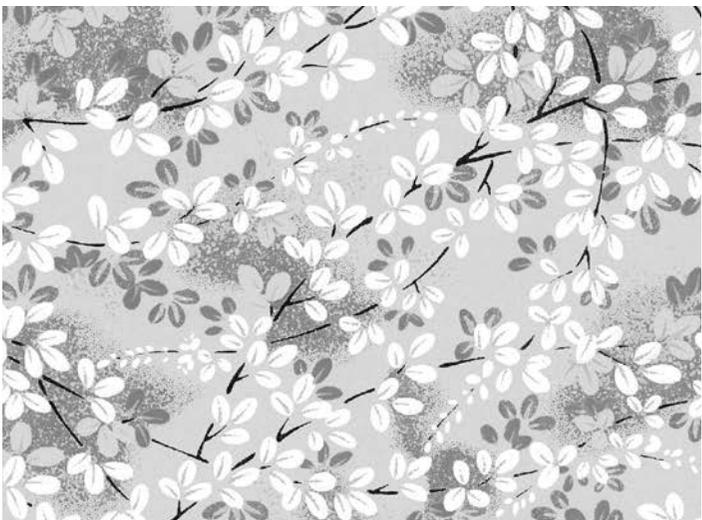
ことばの味が最大限に発揮されますね。そこがおもしろいのです。

ことばの意味をつないでいけば、文章を書くことができる。だけど、俳句をつくるときは意味だけでなく、風味を盛り込むことが必要です。ことばというのは氷山型をしています。水面から上に出ている一部分が意味で、それを使って日常で会話する。だけど、ことばには、そのことばが含むイメージや記憶など、水に沈んでいる部分がある。俳句にかぎらず、詩歌はその性格をうまく使おうとします。俳句はとくにそれが顕著でおもしろいのです。新聞記者が風味に惑わされると、とんでもないことになるから気を付けねばなりません。(笑)

遺伝子に組み込まれた歴史的記憶と美意識

安成 ● 芭蕉もよく使いましたが、「萩」という季語は俳句によく使われます。もちろん、実在する植物ですが、現在ではそのあたりに生えているようなものではありません。それなのに、身近で親しみのある植物として、多くの日本人に認知されている。それがどうしてなのか、不思議なのである。

長谷川 ● 萩は里山文化と重なっていると思います。農業と同じように里山にも一年のサイクルがあって、春に芽が出て、秋には花が咲く。萩は刈り取って薪にもしますが、野焼きをする。すると、春にまた芽が出てくる。焼き畑農耕の時



代には身近な植物だったから、農業よりも古いかもしれない。

安成 ● 萩は、生態学の言葉で「パイオニア植物」というそうです。土地を開墾して、初めに芽を出す植物だからです。奈良時代から平安時代は、森や原野をどんどんと開墾していきましたから、当時の人は田んぼを増やす過程で、最初に芽を出す植物として萩を見ていたのだろうと思ふと、なるほど。

長谷川 ● 春に野焼きをしたあと、真っ黒な地面